

[報告]

第4回ポーランド文学世界翻訳者会議参加報告

小椋 彩

4年ごとに開催される、ポーランド文学翻訳者が楽しみにしているお祭りである。会議を主催する書籍研究所 (Instytut Książki) のサイトには以下のようにある。

「翻訳者は私たちの文学の最良の大使だ。彼らの努力と従事があってこそ、ポーランド語の本が国外で出版される。出版社と契約し、市場の動向を観察し、しばしば本にコメントまでつけるのは彼らだ。翻訳者会議は何より、彼らの祝祭だ。会議の三日間は、作家や出版社、文学研究者や批評家との出会いに満ちている。私たちは私たちのゲストが、文学事象のきわめて重要なテーマや知的潮流、あるいは単に、いまヴィスワ川流域で流行っている本についての知識を深め、クラクフから旅立ってくれることを願っている」。

4回目にあたる今年、50以上の国々から招待された翻訳者は300名にのぼり、会場のICEクラクフ・コンベンションセンターを中心に、講演会やワークショップ、エクスカージョン等、様々なイベントを楽しんだ。日本からは、レム、シンボルスカ他多数の翻訳で知られる東大の沼野充義氏、翻訳活動の他に自身も詩人であるつかだみちこ氏、少年少女向け文学の翻訳を中心に活躍する田村和子氏、加えて、カシュブ調査で同国滞在中だった北大の野町素己氏の途中参加もあった。筆者自身は三度目の参加になるが、国がこの種の文化事業にこんなにも力を入れていることに、毎回率直に感動と感謝を覚える。

会議は歓迎セレモニーから始まり、2016年4月に書籍研究所所長に就任したダリウシュ・ヤヴォルスキ氏の挨拶、作家アントニ・リベラ氏の基調講演に続き、2000年度欧州文化首都にも選出された「文学の街」クラクフの紹介と、出版各社のプレゼンテーション、昼食をはさんで午後は少人数に分かれてのワークショップが行われた。これは主に作家を囲んでのディスカッションと講師による各種レクチャーから成り、初日と2日目あわせて計16。事前に参加希望を提出してあるが、出入りは勿論自由である。「ポーランド性」という伝統的テーマに関する議論から、SF・児童文学・自伝等の各ジャンルにおける新傾向、近年再注目を集める古典作品、エッセイ、戯曲、マンガをめぐる議論、文学における音楽性や、ソーシャル・メディアの言語状況等々、それぞれの専門家による特色ある講義が提供された。最終日となる3日目のパネル「ス

ラヴ学研究とポーランド文学のプロモーション」では、ほとんどの国（語）で研究者が翻訳者を兼ねる現状に鑑み、複数の登壇者を中心に文学研究とプロモーションの兼ね合いについての意見交換が行われた。そして最後、全員参加のパネル「書籍研究所はどのように翻訳者を助けるか」においては、研究所に向けて、翻訳者の側から様々な提案や要望が投げられた。「翻訳した本が何らかの事情で出版されなかったら、それを補償する制度がほしい」、あるいは「翻訳者に対する前払い制度がほしい」「完成した翻訳を買い取ってほしい」という、しごく実務的かつ少々無茶な要望がこぞとばかりに出され、ホールの温かい笑いを誘っていた。半ば冗談（おそらく）とはいえ、ここであらわになったのは、時間のかかる孤独な作業のなかで翻訳者が感じているのは、当然ながら楽しみや誇りだけではないこと、そして、まず楽しみ（あるいは責任）を感じるような人でなければ翻訳などしない、要するにこれが「割に合わない」営みだということを、世間にもっと認識してほしいという、翻訳者たちの心の叫びだった（かもしれないが定かではない）。

一方、この会議にあわせて行われる恒例の「トランス・アトランティック賞」授与式も、参加者の大きな楽しみとなっている。ポーランド文化の発信者として世界の優れた翻訳者を表彰するもので、今回も、初日の晩に、スウォヴァツキ劇場でテレビ中継を交えて華やかに開催された。受賞の榮譽に浴したのは、ハンガリーのライオス・パルファルヴィ氏 (Lajos Pálfalvi, 1959 生)。1980 年代後半より、古典から現代作家まで重要な文学作品を体系的・継続的に翻訳・出版している（訳書は 55 冊にのぼる）同氏は、文学史家としても活躍しており、ハンガリーにおけるポーランド文学普及への多大な貢献が認められた格好だ。

初日に行われた基調講演「現代の芸術家とはだれか」で、作家であり文学研究者でもあるリベラは、芸術が商業主義に屈する現代の文化状況を嘆いた。作家たちが市場の要求に応じて作品を書くのは、物神崇拜のはびこる世界においてもはや致し方ない。そこで氏は問う。いったい誰が現代の芸術家たりうるか。氏によれば、問いの答えは開かれており、作品を創る作家本人というよりも、芸術家でありたいと願う人間と、その人間が自分の使命をどう見るかにかかっている。芸術の創造とは形式の洗練に等しいが、同時に、太古から繰り返されてきた人類の問いを、改めて芸術家はその身に引き受けることでもあるのだ。運命について、存在の意味について、世界と一体になるということについての問いを。

翻訳すべき本を翻訳者たちに問う形で、リベラの講演は終わった。その答えを確認するという意味でも、四年後にまたこの場にいたいと、参加者たちはみな願ったと思う。そして本報告を書いている最中に、関口時正訳『人形』が 2017 年度読売文学賞（翻訳部門）を受賞したとのニュースを聞いた。分割占領時代のワルシャワを舞台にした

ボレスワフ・プルスによる長編小説、ポーランド人ならだれもが知るポーランド文学の傑作、まさしく古典でありながら、これまで日本語訳はなかった。翻訳が研究と分かちがたく結びつき、なお芸術でもある、このような例を目指すべきだろうと、クラクフでの6月の数日間を思い出しつつ、いま改めて強く感じている。



筆者、作家オルガ・トカルチュク氏、沼野充義氏 スウォヴァツキ劇場にて